

## 通信長の覚え書き……その1

こんにちは、江の島丸の通信長の高橋です。

これから時々船の事についてお話させて頂きたいと思います。

今回は無線関係についてです

電波の型式が・・・、アンテナの長さが・・・といった堅苦しい話ではなく、時代の流れの中で色々と忘れ去られる前の覚え書きみたいな物です。(歴戦の通信長に比べれば、まだまだヒヨッコですが・・・。)

私が船に乗ってから変更になった事柄がいくつかあります。

今、無線の世界で使用している時間の基準は、UTC(協定世界時)ですが、以前はGMT(グリニッジ標準時)と言い東経0度、西経0度の子午線が通るイギリスのグリニッジ天文台の時刻を基準としていました。

色々と難しい話があるのですが、時を刻む基準の場所が一緒なので「呼び方が変わっただけ」と言う感じです。

ちなみにJST(日本標準時)は、東経135度の子午線が通る兵庫県の明石で刻んでいます。(UTC+09:00)

マグロ船のように遠洋航海などに行く船にはSMT(船内時)が存在しますが、通信業務はJSTで行うため生活は船内時、仕事は日本時となり、移動に伴う船内時の時間調整で時間が進むにしろ遅れるにしろ、仕事の時間がズレて行きます。経度を約15度移動するごとに1時間の調整だったと思います。(西に行けば-1時間、東は+1時間修正していきます)

ちょっと話が横道にそれました。

天気的气圧もmb(ミリバール)からhPa(ヘクトパスカル)になりましたしね。

もっと前ですと周波数もサイクル(c/s)からヘルツ(Hz)に変わっています。

今は普通にkHz(キロヘルツ)と言いますが、私が船に乗りたての頃はまだkc/s(キロサイクルですが"ケーシー"と呼びました)を使っている方もいました。

特に大きく変わったことは、遭難と救命に関する制度です。

新しい救難のシステムについては後日お話しををするとして、今回は少し前の事を思い出してみます。

むかしむかしのタイタニック号の悲劇により、遭難通信に関することが体系的に整備され、無線電話による遭難信号は「メーデー・メーデー」、無線電信のモールス信号は（SOS



・・・――・・・）であるのは皆さんも何処かで聞いた事があるかと思います。

実際にはその頃からSOSは決まっていたし、タイタニック号もSOSを打ったのですが、不幸にも聞いている人がいなかったと言う話もあります。

ちなみに、我々通信士は"いざ"と言う時の為に間違っても冗談やテスト信号でメーデーやSOSは絶対に叩かないのです。

写真1 モールス信号の送信機  
(電鍵(でんけん)と言います)



旧制度(後で説明します)の名残りと言うか、過去の遺物に近いものと言うか、それがこの江の島丸の無線用の時計です

この時計、私たち無線屋さんにとっては馴染み深い物なのです。

この船を建造した平成17年にはすでに制度的に必要無く(時計そのものは無いといけません)、もはや製造されていないとの事だったので名残り惜しくて先代の江の島丸から移設させて頂きました。

写真2 江の島丸の無線用時計

実際、時計自体はもう壊れてしまい(前の船で20年使ってましたから)、外側と文字盤はそのままに

して本船付属の時計と中身を入れ替えて使用しています。

この時計の文字盤を見て頂きたいのですが、0分～3分までと30分～33分までが緑色、15分～18分までと45分～48分までが赤色に塗り分けされています。

緑色は無線電話の時間帯で第二沈黙時間、赤色は無線電信の時間帯で第一沈黙時間と言いました。

旧制度では、「この間は電波の発射を禁止して、助けを求める声(モールス)を皆で聞きましょう」と言う時間帯を定めていました。



写真3 江の島丸の通信機器(通称；無線卓)

各無線局は陸上局、船舶局等の区別なく運用時間が決められており、種別により電波を発射できる時間や聴取時間を義務付けられていたのです。

通信士が一人の局はこの時間帯、二・三人ならこの時間帯と決められ、各無線局の所在地や海上での位置による時差により聴取する時間帯がずれるため、この沈黙時間は世界の何処かで誰かが聴取している状態を作り出していました。

相互扶助的な人海戦術(こんな言い方をすると怒られてしまいそうですが)で世界の海上の安全は守られていました。

それだけ通信士は責任と自覚を持って当直時間を過ごしていたのです。

その他にも警救信号自動受信装置など、運用時間外での異常を知らせる機器がありました。

もし、船を見学する機会があり、無線室を見る事が出来る様なら、そんな所も見て下さい。この時計が付いていればそれなりに古い船か、通信局長さんが古い船から持って来たのかもしれない。

今回はこれまでに.....。

また何か思い出すか気が付いたときに書かせて頂きます。

その前に忘れてしまうかもしれませんが...

それではひとまず、このへんで失礼します。

さようなら。